

お伽訓話

猫なしの國

是は北京童蒙院保母主任たる加藤貞子氏が清書中より譯して送られたるものなり茲に掲載して好意を謝す

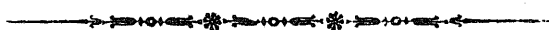
或る田舎（東京近在宜し）からん支那語にては北京の城外としてありますに太郎といふ七ツ位の子がかりました此子は未だ小さい時にか父さんも母さんも亡くなりましたのでいつも小さい時のものを着て村中の人の下さる御飯のお残りを貰つて毎日過でして居る可哀相な小供でございました此太郎は皆様のやうに日曜日には何處かへ連れて行て下さるお父様やお母様がないので生れてから一度も東京といふ處へ行たつとがありません唯人の話に日本中で東京よりよい處はない東京は天子様の居らつしやる處で街は美しく賑かで人の通る道の下はすつかり金のかわら敷いてゐるといふことをきいて居ましたので何卒一度はそんな處

へ行つて見たいものと思つて居りましたが或る時村の人が東京にゆくといふことを聞き何卒つれて行て下さいと頼みましたがきゝませないのでさうつと其人の後から分らない様についてゆきましたらやがて賑かな町へ其日の夕方つきました（原文は賊の門につきましたとしてありますこれは乃ち城内にはいつたことですが日文では云ひようが分りませぬ）見ると前に見たをもない黒塗の馬車だの自轉車だの自動車、電車一つとして驚かないものはありませんけれども太郎はこんなものを見てゐるよりも早く金の磚のしいてある處に行つて夫れを五つ六つ拾つて村に持ち歸り始終お飯を戴く方になつたり又之をお金ととりかへてお金持になつたいものだなんていろ／＼考へながら道を歩いて行きますすけれどもちつともそんな處は目付からず泥の道ばかりなので大層心配しはじめました其中に日はもうとつぶりとくれて町の兩側には美しい電氣や瓦斯の光が輝きはじめました見れば町の道は丁度金か銀の様に明かるく見えるので太郎は爰に始めて自分が人の話を信じすぎたことを悟り又そんな

な貴いものは決してたゞ捨つては得られないものだといふことが分りました其内にだん／＼お腹はすいてくるので或る家の門の前に腰をかけて休みながらいろ／＼考へると自分が村に居たときでさへ人のお使や羊や豕の番をしてゐさへすればこんな餓しい思はしたことはなかつたと後悔をしましたは今は今もう歸るには歸れずその上道も分らないのだから此太郎の小さい胸でいろ／＼思案しながら此日本一の東京だから又私の様なものでも使ってくれる人がゐるかもしれぬ。誰か使ふ人があつたら一生懸命に働いてそして村に歸りませうと固く決心しましたさて太郎はつかれた足もひもじい腹も忘れて主人をさがしにすた／＼とゆきますとやがて大きな立派な家の前に來ましたので太郎は「ごめんなさい」といつて門をあけてはいつてゆくといふ一人のばわやらしい人がでゝ來て太郎のきものを見るが早いから「この乞食小僧本もよませ、はたらきませずして人に物をもらひに來たか、なまけもの」と大きな聲で申しますので太郎は「いえ私は乞食ではありませせん私は小さい時に父母

に別れました誰か私を學校にやつて下さいませう私は如何な仕事でも致しますとどうぞ使て戴けませんでせうかと頼みますと、おばあさんは悲しいかほをして「何をぐづ／＼いつてるんだこんな汚ない子は何處だつて使ふ人はありませんよ、さつさと、かへらないと沸湯をぶつかけるよ」といひますので太郎は口惜しさ悲しさが泣かんばかりになりましたが其家を出て街の木の下に休むと飢と勞れで前後も知らず眠りました。

すると丁度そこを一人の金持が通つて此寒いのにか哀相だと思つて起している／＼聞てみると前のこゝとがすつかり分りましたそこで金持は太郎をつれて家にかへり臺所のお手傳をしました(原文下でつく)太郎は臺所に行ってみると臺所の女中はさつきのにくらしいおばあさんでしたので太郎は一目見るとこはくたまりませんでしたおばあさんはご主人のお命令なので仕方なしにぶつ／＼いひながら太郎にいふには「私はお前より年も上役も上だからもし私の氣に入らないををするると私はお前をた／＼がよいかへ」と申しますと太郎は唯「は



い」と返事をして其翌日からは茶碗も洗へば水も汲むし七つの子供とは思へぬほどすなほによく働らさましたけれどもおばあさんは何とかいつては太郎を叱つたりぶつたりしました、しかし太郎も男子ですから此位のは仕方がないと我慢して働きました、太郎にはまた此上につつらいとがありましたが、それは太郎の室は臺所のわきなので鼠が非常に多く毎夜澤山の鼠がこへ出て来て餌物のとでけんくわをしたり又は太郎の足にかみつくやら面の上をあるさまはつて途にはしつかくやら丸で太郎の部屋は鼠の遊戯室で太郎の身体は鼠のちもちやのようでした夫故太郎は晝の疲れを折角床に入つて癒さうとしても眠ることさへ出来ぬので日一日と疲れてきました、これが太郎の身にたつては何よりも難儀なのでいつも人にいふには私は晝の内のお婆さんよりは夜の鼠の方が餘つぽど恐ろしいと申す位でした。

そうこうする内に月日はだん／＼とたつて行き丁度年の暮となりましたので太郎の主人の家では召使のもの各自へそれ／＼お歳暮が outcome して太郎に

も大枚壹圓のお金を下されました太郎は生れてから壹圓といふお金は始めて見たので大したお金を戴いたと思つて有難く頂戴し大悦びで室に歸り「さあ此お金を何につかひませう」と考へましたが見れば自分の着物がぼろ／＼なので一つ來年から新しい着物を着ませうと思つて大急ぎで古着屋に行きかい「私に相當のを一つ出してくれ」と威勢よく壹圓札を投げ出しました店の者は之を見て驚いていふにはどうして／＼「壹圓ではとても古着でもきものは買へませんよお前さん仕立屋へいつて其破れでも直してもらへば一圓位ですむかもしれぬいからそうして年をお取りなさい」といひました丁度此時町を大きな聲で猫は要りませんか／＼と賣て歩くものがありました太郎は之をきいて直に毎夜の鼠の苦を思ひ出し壹圓できものが買へないなら猫を買つた方がましかもしれぬと思つて其猫を見るに頭の丸い尾の短かい丸々とした可愛い猫なので「これはいくらなら買りますか」とき／＼ましたら「たつた五十錢で宜しい」と申したので早速太郎は買ひ受けて家につれて歸りましたが太郎

はお婆さんに見つかつて太郎ばかりでなく猫までも来てご主人の飯をたべると云はれるを心配してさうつと自分の室の中にかくし自分のたべたい飯を分けて猫にやつて居りましたそれからといふものはもう鼠の心配がなくなりました。太郎の主人は貿易商人で漁船を五六艘も持てゐますとして年に何度と時をさめて外國に去きます其時は家中の召使までもそれ／＼糸を買たりお茶をかつたり瀬戸物を買つたりして之を主人に托し之を南洋と野蠻人の處へもつていつてあちらの物ととりかへたりお金と換へたりして其儲けは主人が南洋から歸て來てから戴くことになつてゐました丁度又主人が南洋に出かけるので他の人は夫々いゝろんな物をご主人に願ひましたが太郎は何にも出させないので主人は「どうだお前も一つ何か出さないか」と云はれますので太郎は私には何にもありません只有るのは一匹の猫ばかりです」と申しますと主人は「猫でも賣れるかもしれない一つつれて行つて見よう」といはれますので太郎も仕方なく室にかへつて大切に／＼猫を破れたふとんの

中から出して泣く／＼之を主人に渡しますとお婆さんにはじめ他の召使まで大變に笑ひました。太郎は猫が居なくなつてから鼠は又前通りに來て今度もやつぱり夜はろく／＼眠れないで困つて居りました其上お婆さんは意地悪く日一日と烈しくなりましたそのして或時太郎にいふにはお前がご主人に願ひ猫が萬一買れたなら丁度いゝから私に大きな杖を一つ買ておくれ毎日お前をうつだけでも手が痛くてたまらない」と申します、こんな風で太郎は毎日つらい／＼月日を汗水たらして働いて居ました時には逃げ出そうかとも思ひましたが、さてよもう少しでご主人はお歸りになるのだからと目をつぶつて我慢して居ました。お語替て主人は日本を離れてから數月の後或る南洋の一國につりました主人と土人とはもう度々來たのでよくなれてゐるので船がつくとまもなく土人は大悦びで迎へに來て品物を陸上げの手傳をす一方ではどん／＼商賣がはかどつて一日の内に大概うれてしまひました主人はそれ／＼帳面に記しましたが一ツ太郎の猫は餘りよくうられたのでう

れしくて忘れてしまひました主人は殘してゐいた
 一等よい珍らしい日本の品をいくつか王様に献上
 しました王様は大變に悦ばれ主人を召しに
 になつていろ／＼と馳走を下さいました丁度これ
 から飯を戴かうといふ時ふとみると食堂の隅こ
 にまわ／＼澤山の鼠がうちや／＼と固まつてゐて
 じろ／＼と此珍客を見てゐます主人は此鼠が少し
 も人を恐れぬのを不思議に思つて恐る／＼國王に尋
 ねますと王様は「あなたは初めて見るから不思議
 なのだ我國では鼠はもう非常に多くて手の付けよ
 うがない仕方がないからうちやつておくのだお
 國には鼠はゐないか」とおき／＼になりました主人
 は太郎の猫を思ひ出して直に「我國にも鼠は居り
 ますけれども猫といふ鼠を食へる獸がありますの
 で鼠は猫を見るときもう出て来ません只今私の船の
 中にも一匹つれて参りました王様もこれを宮中に
 お飼になればもう鼠はよく退治が出来ます」と
 申し上げますと王様は大喜びで「もし此話がかん
 とうなれば私は如何に高くてもい／＼からは非買ひ
 度い」と仰しやいました主人は早速に船に歸り猫

をつれて宮中に行きますと王様はもうさつきから
 別のおさしきで待ていらつしやいました主人は鼠
 がさつきのと馳走のお残りを食べに来るところを
 見計らつて其中に猫を放すと思ひかけない強敵の
 来たのに驚いて逃げる追ふ大變な騒ぎで忽ちに一
 匹を捕へてう／＼いひながら食べ始めました王
 様はこれをご覧になつて大變にお喜びになりました
 たが王后は大變に恐がつてゐらつしやいますそこ
 で主人は王后に「猫は鼠をたべますが人には少し
 も害をしませんでよく人になれ誠に可愛いもので
 す」と申し上げたので王后は之を膝に抱き上げま
 したら少しも人に恐れませんでした王様は之を見
 て大に安心なされではこれを宮中に飼ひたいから
 何卒置いていつてくれお禮は之だと云つてたつた一
 匹の猫に十萬圓といふ大した金を下されました
 それから後猫はもう始終王皇后のお側を片時もは
 なれず猫無國宮中で大威張りですぬるには立派な
 おふとんの上喰べるものは鮮らしか魚で丸で王猫
 さまです宮中も亦此から後は鼠も出なくなり王様
 と王后が此猫を愛する事は丸で自分の子供のよ

でした主人は其後數多の儲を得て日本に無事歸り
 召使にもそれ／＼貿易した品物の代を渡しますと
 大した儲けなので家中大喜びでした
 主人は次に又大きなお金のふくろを重さうに出し
 ました皆は一目見てさつと之は主人のだらうと
 思ておますと主人は召使にこれは私のものでは
 ない太郎の猫の代だ「おい／＼太郎は如何した太
 郎を呼んでこい」といふので皆呆氣にとられてお
 ました主人は一同にこの猫の話について話した上
 に「もうこれから誰でも太郎とよんではいけない
 太郎先生といへといつてゐる處へ太郎は出て來ま
 した丁度臺所で水汲をしてゐたので着てゐる破れ
 ぎものは泥や水だらけ面は汚れてあかだらけ髪は
 ばう／＼して草のよゝなので一目見ると皆笑ひ出
 した皆は「太郎先生汝の猫は賣れましたかめでた
 う／＼」といふので太郎は不思議な顔をしてゐ
 ると主人自ら手を取つて座につかせよとします
 ので太郎は屹度主人始め皆で私をばかだと思つて嘲
 弄のかと思ひわわ／＼と泣き出して而して云には
 「臺所のおばあさんは私に毎日水をかつがせた上

に私をいぢめます何卒只今暇を下さいそうすれ
 ばもういぢめられないですみますから」といふと
 主人は「もう／＼そんなさゝいな事は云はないで
 むらつしやい今先生は私より何層倍といふ大金持
 になりました」といつてさつさきのお金を卓の上
 に出して山のよゝにつみましたそして猫の始末を
 すつかり話しましたので太郎も始めて分り夢かと
 計り悦びましたそしていふには「之といふも全く
 ご主人のおかげ又猫を買つたお金もご主人が下され
 たお金ですから何卒半分はご主人お受け下さい」と
 と申しましたが主人は決して受けません其處で其
 内の幾何かを召使の友人に分けました其中には始
 終太郎をいぢめたお婆様も、もらひましたそこで
 一人として太郎に感心しない人はありませんでし
 た太郎はもう大金持になりましたがご主人と別れ
 るのを惜しんでそれから主人の家の中に住まは
 して戴き主人に對してはやはり尊敬をして友人に
 對しては元の通り少しもかはらす叮嚀にして毎日
 學校にゆきよく勉強して數年後には學校も辛
 業し立派になつて田舎へ歸りましたとさ。